徳島大学における学習支援 Study Support Space の存在意義

仲村真樹[1)]、吉原 祥[2)]、桐畑尚真[2)]、中島由衣[1)]、
佐藤孝之[3)]、國見裕美[3)]、塩川奈々美[4)]、吉田 博[4)]
1）徳島大学医学部　　2）徳島大学理工学部
3）徳島大学附属図書館　　4）徳島大学高等教育研究センター

1. はじめに

中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」が発表されて以降、大学教育においてアクティブ・ラーニングが強く推進されるようになった。このような背景のもと、大学図書館においても、学生のアクティブ・ラーニングを支援するために学習・教育支援機能の強化について検討されるようになった[1)]。徳島大学附属図書館においてもラーニングコモンズが設置され、2013 年度より学習相談 Study Support Space（以下、SSS）が開設された[2)]。

SSS は、学生の学習に関する相談に教員、大学院生がアドバイザーとして対応する取り組みで、徳島大学のサポート系サークル「学びサポート企画部」に所属する学生と図書館職員の協働によって行われている。2013 年 4 月に開設して以降 2019 年度まで、授業実施期間中はほぼ毎日実施してきた。2020、2021 年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、2020 年度は前期に 34 日間実施し、2021 年度は全く実施していなかった。2022 年度は前期の授業開始に合わせて第 2 週から相談を再開し、後期も継続して実施している。

コロナ禍では、授業に関する質問を教員にしづらいことや、授業内容の理解に関する不安、将来のキャリアに対する不安、相談する相手がいないことなどの学生生活の実態が報告されている[3,4)]。

そこで、本研究は、一時期の中断を経て、コロナ禍で再開した学習相談 SSS の存在意義について、アドバイザーを対象にしたアンケート調査をもとに検証を行い、明らかにするものである。本研究により、コロナ禍における徳島大学の学習支援及び教育の在り方について考える端緒となることを期待している。

2. 学びサポート企画部

学びサポート企画部は、「大学生の日々の学習における躓きに対して、学習支援を行うとともに、学習をするために必要な基本知識・技能を習得する機会を創ることで、大学生の学習スタイルの向上、改善を行う」という理念のもと、学生 4 名と図書館職員 2 名、教員 2 名（2022 年 11 月現在）で活動している。大学図書館と協働して、SSS の運営の他に、留学や卒業研究などをテーマとした学習関連のイベントを企画・開催している[5)]。

3. Study Support Space の相談実績

SSS は、学生の学習に関する相談に教員、大学院生がアドバイザーとして対応する取り組みで、SSS の時間割に合わせて附属図書館 1 階のピア・サポートルームにて学生の相談に対応する。2013 年度の SSS 開設以降の累計相談者数は表 1 の通りである。1 日あたり約 3 名の学生が相談に訪れており、数学、物理、化学、生物、英語、レポートの書き方などの学習に関する相談が約 8 割であり、留学、進路、学生生活などの学習以外の相談が約 2 割である。

表 1　SSS の累計相談者数（2022 年 9 月末現在）

年度	実施日数	相談者数	学習相談	学習以外の相談
2013	153 日	353 名	225 名	127 名
2014	151 日	394 名	253 名	141 名
2015	150 日	289 名	196 名	93 名
2016	140 日	317 名	277 名	40 名
2017	150 日	392 名	331 名	61 名
2018	150 日	714 名	663 名	51 名
2019	150 日	873 名	793 名	80 名
2020	34 日	102 名	92 名	10 名
2021	0 日	0 名	0 名	0 名
2022	75 日(前期)	225 名	189 名	36 名
合計	1152 日	3658 名	3019 名	639 名

※2022 年度は前期の授業開始の翌週から実施し、後期も継続実施している。
表の数値は前期のみの実績を表している。

4. SSS の存在意義と今後の課題

2022 年度に SSS のアドバイザーを担当している教員 9 名、職員 1 名、大学院生 2 名を対象に、SSS の意義に関する web アンケートを実施した。2022 年 10 月 17 日にメールでアンケートを依頼し、20 日までの期間に 11 名から回答があった。

(1) 徳島大学の学生における SSS の意義

はじめに、「SSS による学習支援は徳島大学の学生にとってどのような意義があると思いますか（記述式)」の回答について考察する。ここでは、ほとんどの教員が、授業内容について質問や相談ができるという点を挙げていた。また、「質問をすることに対する負担や不安を軽減できる」、「学習意欲が維持できる」、「深い内容について理解できる」という記述も見られた。

また、大学院生のアドバイザーからは、「コロナ禍で近しい先輩ができにくい状況で、先輩の過ごし方やアドバイスを貰えることは勉強の先取りや安心感に繋がる」という回答が得られた。徳島大学の学生にとって、何かのきっかけがなければ、大学院生や先輩学生と話す機会を得ることは困難であると考えられる。コロナ禍で大学における様々な活動が制限されている状況で、先輩に大学生活の相談ができる点も SSS の意義であると言える。

(2) アドバイザーにおける SSS の意義

続いて、「SSS のアドバイザーを担当することはあなたにとって、どのような意義がありますか（記述式)」の回答内容について考察する。ここでは、「学生がどのようなことに不安を覚えているのか、躓いているのかを、身近に感じることができ、自分自身も指導者としての気づきを得ている」、「受講生が教科にどのような事を期待しているのかを知ることが出来る。」など、学生について理解できるという点を多くの教員が挙げていた。また、「学生が授業で理解できなかったことを知ることができる。学生の困っていること（勉強だけでなく）を知ることができる。それによって、ある程度の対応をすることが可能になる。」、「授業時間に説明不足であったところが質問されるケースがある。自身の授業における説明を再考する場となっていて、教員の授業改善にもつながっている。」など、授業改善に役立っているという意見も挙げられた。さらに、「担当する授業で困っている学生に SSS を勧める」という回答もあり、教員がオフィスアワーとして利用していることも窺える。

(3) SSS の改善点及び今後の課題

最後に、「SSS の改善点があればお書きください（記述式)」の回答内容について考察する。ここでは、「完全に閉鎖された空間であることから、やや目立ちにくい」、「利用者増加に向けた広報活動が必要」、「SSS の知名度が低い」、「本当は質問したい学生はもっといると思うのだが、そのような学生が SSS へ足を運ぶ工夫が必要」との意見が挙げられていた。SSS の活動は学内掲示物や SNS（Twitter や HP）を通じて広報されているが、認知度の低さや、利用すること・質問しにくることへのハードルの高さがあることが窺える。

今後は利用者増加に向けたイベントの企画や、相談に対応する関連授業での広報など、知名度改善に向けた取組を強化する必要があるだろう。

参考文献

1) 長澤多代（2013)「主体的な学びを支える大学図書館の学修・教育支援機能」、京都大学高等教育研究、19、99-110.
2) 佐々木奈三江、亀岡由佳（2018)「学生・教職員と共に創る学習支援の場としての図書館」、大学図書館研究、110、2023-1-11.
3) 文部科学省（2022)「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果)」 https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf(2022 年 11 月 4 日閲覧)
4) 全国大学生活協同組合連合会（2021)「届けよう！コロナ禍の大学生活アンケート集計結果報告」 https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/pdf/covid_enq_2108_02.pdf(2022 年 11 月 4 日閲覧)
5) 本田剛士、下村宗央、畑中唯菜、片山裕之、枝川恵理、亀岡由佳、吉田博（2016)「徳島大学の教育・学生の学びに与える Study Support Space のインパクト」、平成 28 年度大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集、10-11.